



國家圖書館編

東亞同文書院

中國調查手稿叢刊

18

六月三日

國家圖書館出版社



國家圖書館編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

18

國家圖書館出版社

第一八冊目錄

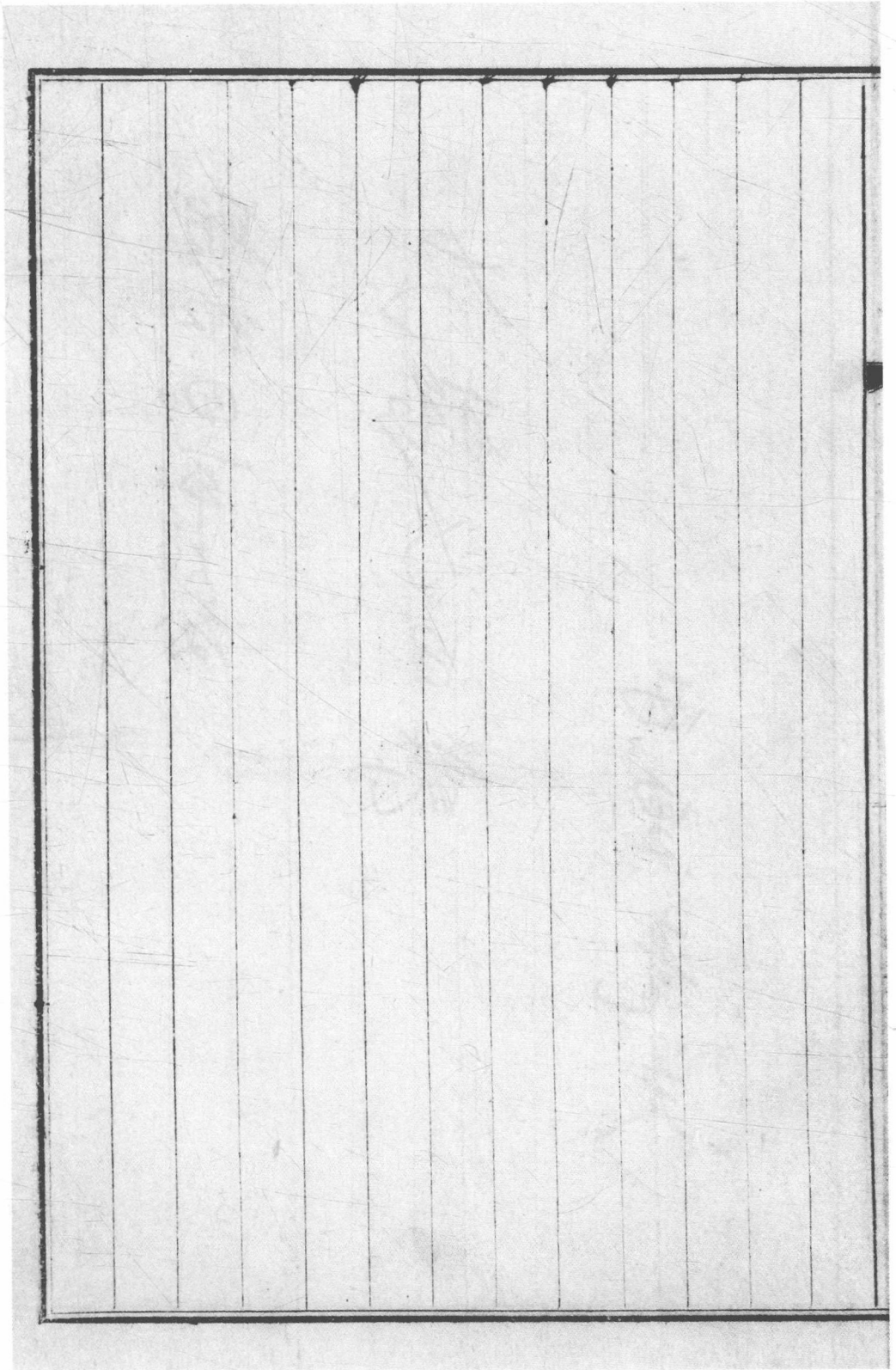
昭和四年（一九二九）旅行日誌（第二十六期生）

西里龍夫	第十四卷		一
勝川秀夫	第十五卷		六九
森口幸藏	第十六卷		一二三
木島清道	第十七卷		二七一
上田駿	第十八卷		三四七
高橋龍夫	第十九卷		四四七
武川信佐	第二十卷		五三七

昭和四年

大杉乃日誌

西里竟夫



東亞同文書院

四卷 調査旅行日誌

二月九日

晴天

館中報り杵な感激と、大陽り杵な回廊を這々と抱きし

りて、
氣吹けり——
舞臺を浴びて、
雪うま古ト日ハ暮

る、……の垂きを浴びて、
旅行隊の幾班か

は、レヤネリアの街、
歡樂の街、
カクテルと口紅の

上海を一打四十五分の一
年ハエカキを打ち振る

南へ——
北へ——
旅立つて行く。

昨日——
東三省の新交通路東北斜線経済調査班

一行四名の、まだ見ぬ未来への憧憬へ、前進の朝。

爆竹と、拍手とに送られ、
院門をすべり出たのが

午前九時。

朝露ハ、小玉ニ光リ、アカシヤリ並木、プラタナ
エリ稍、にも一株リ惜別ノ哀然ト覺ヘテ、自
御ヲハ、フラスナラシモ心ヲ走ル。

大連砦頭ー。

若ハ直線ヲ愛スル、オシテ感激ト生スル、オシニハ
神聖トビリ、ふとわセ別離リ、レハ展開ス
ル。

男、男、男。女、女、女。それら、あらゆる存在と
残ニ、たゞ、あつた、男、男、男。

ワ、ワ、ワ、濁流ハ、夏夜樹ノ光ル。泣かたハ、
だが、私達ハ、前進ヲ熱マシム。

満洲ニ向ハ同志四班ニ、余名ト同船、燃焼スル
感激ト感激ト、錯綜。

血で染めた称な。じやうの晒の帆。スクリューの騒
音が空を渡るの耳朶をたたく。

鵬程三万華里、――

今同生活の何れか把握せんものと。意をなすと熱
もろ着き日の一頁を曇も美し、彩り交いもいと
雄々しく登る旅島立ちう。翌日はかくも暮る
るやう。

五月廿一日。

よぶしい初夏の朝光。其の正十二時 青島着。
青島―― 赤尾根の街。アカリヤの街。明か
い静かな別荘の街。たが青島は船かき
眺むが一番の。それ―― 幅の油絵が、オ伽の国

3

都だ。

五町間一帯留しか許されなへ。早速上陸。
先聖寺町氏の案内で市中一巡。

日本一青島神社、日本一忠碑、日本一中華生。

日本一市場三丁目と、誰うぶ云々。ヤに青島ハ

日本一青島だ。山東一表玄関だ。日本一努力力

は、まだ――根拠よへ格に感ぜられん。

帰船！。山東移民と、青島卯日おとえうい

ぬ。

名残ぬしい青島だ。あるが、船ハ錨を上げた。

和ハ成熟しきんサセの午後のなやみさうと

そつと、そうさ。ベッドに包んで眠るにぬらん。

六月 日、晴

大連！ 正午近く、大連着。

南方の窓大連、満洲の大連、煤煙の中に大連大埠頭が現出する。

由大埠頭より施設は、港の價値を裏きけするものなり。大連港の消長をいふは、満洲に於ける。我が日本の経済的バロメーターであり、邦人、在滿其生活部に一脈の生命を附するものなり。いかにいふにしろ、

今般本船に便して、吾の岸壁は、全長一四〇〇尺、各四〇〇尺の繫船区實に二十七ヶ所あり。

其みにハ工費七十万円を要し、五千噸の収容力あり。船隻待合所の偉觀が横に在る。

農産物を出廻り期に大豆、豆粕、高粱、豆油
の野積いたしかに見もあり、たすに遠いせい。

汗と高、血のいどむが役にうごめく支那苦力の
荷役が師者いたすに平均六千乃至八千の出
働を見ることが。

隈部氏や、先輩の―出廻へとうけろ、とにかく隈部
氏の宅へ本陣を構へた。

満鉄兒を養育に、先輩木付氏を訪ふ。吉本、海竜
のた。吉海、鉄道が完成金通、そそりて初めを
知る。

満鉄本社に行く。吉会保を中心として山東徐氏が
同島方面に進出をたすか、そんなとも白衛、鮮人が
満洲に進出をたすか。――即ち、日支勢力圏の

抗争に就き、所同く矢を放つ。

夜、先輩、米良氏に伴われ、夜の犬道を歩く。

日平娘の素直な街。今くの日平だ。

所象の交通機関たつ馬車——ネタールマカから道路
の清快さと厚々と走る。

小山。罪悪と罪悪の闘争が赤い燈台トが
ら生れ出る、又那の情調もこころでネーと
一入、ナウコ——ヒナと誰かが云うた。

六月二日晴天。

日曜で、各会社が休業だ。此の日を新月、と。旅順
見ろ、

旅順港——これが旅順港……かと思つた、

工科大考を見る。芝の興味もなし。

夜、老虎灘へ。隈部氏の心うつる。歓迎をうける。

奇妙な、天に嘯く猛虎の地貌だ。月落る。星影淡く、風強き、此の宵、杯を奪ね。ガラスを乾かす。アイヌのジャーンとジャーンと文句をきくに終る。けろけろ。

六月三日 晴天。

大連汽船会社へ行く。土居氏の居る所。何かと好都合になる。

満洲平に再び行く。吉会侯の留守の由。侯使「哈爾濱を占領すれば吉林城はくも

なく落城だ」と詰る。そして、調査課主任鈴木氏より色々調査資料を貰う。其処を半辞した。夜、長年の歓迎会に勇敏なる娘と酒を杯哉。

「勇敏なる哉、娘と云ふ。——だが、娘と云ふこそ延氏地より取り先驅者だらうな、悪魔に其の真意に心算だよ」と。丁度其處で終る。だが、其の暗い真意に心算紅い心臓が泣きぬれぬだらう。

二月、曇り

大連を去る。三日間の滞在で、あつたが、私の心と大連の片影丈の影をのこす。

隈部氏、中東、宇野、等々、先づうと送るを謝し、通丸（一ヶ月）に乗船。

船中。デッキンセンの電力の要が可成り、いせう
子を産む、幸と産婆さんに乗船だ。

幸に先きりーと船、静かだ。

「おい仁丹をやろー」

「謝々々々ー」

と若い苦力。幾度も頭を下げた。そして、それをか
んと幸の口へ移した。そのシーンが、私に、あの知れな
い感情のときめきを与へた。

六月五日。

快晴。

白河ー！ かがそい、濁流だ。此、濁流にや

天津、この潮航も終目になる。うは、き理ろくぬる

か。午、十一時、澹古着

街。

屋根止が土で出来て居る。泥家。そゝへ愧

馬車一部券也。

町を一巡り、日中駈在亭へ遊び

二時分法

西側ハ、昭漢堂、泥ノ下、石ノ下、カ

色ソコ 蘇ソコ 灰ソコ 色ソコ 五ソコ 時ソコ 以ソコ 天ソコ 津ソコ

有方子孫之波，其聲能作投宿一休。

予の志は、下く其の是を
領する創設の新富を

乙卯 白布 康武 会 大連 9 将 牙 及 C 其 の 宿 今

主

白河、天津の政治の都、棉花と羊毛を産出す

竹、そへ、その実ね、りか、のち、にた。 郷、今、二、十、

[illegible]